

三水会会報

北里大学海洋生命科学部
同窓会会報 第 59 号

平成22年3月発行

編集者 内藤 文隆

発行 三水会(北里大学
海洋生命科学部同窓会)

事務局 〒246-0031 神奈川県
横浜市瀬谷区瀬谷5-22-1

TEL フリーダイヤル
0120-873-135

目次・北海道地区親睦会	P1	就職ガイダンス	P5
第39回北里大学同窓会講演会	P2	卒業生近況報告	P6
LME研究室OB会	P3	潜水部OB会・第36回漁火祭報告	P7
三水会創設30年を迎えるにあたり	P4	お知らせ「学部だより」・総会案内	P8

北海道地区親睦会

2010年2月20日チサンホテル札幌に於いて

集合写真



札幌時計台

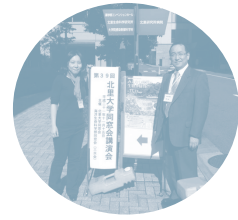


懇親会



第39回北里大学同窓会 講演会に参加して

第16期 磯山真彦



よく晴れた暖かな11月15日の午後1時から第39回北里大学同窓会講演会「みえない世界の生物多様性」が白金にある北里大学薬学部コンベンションホールにて2時間を越えて開催されました。

前日までに236名もの事前参加申込があり、なんとその9割を超える231名が足を運んで頂きました。ご来場者は会場のお膝元である白金地区の方々のみならず、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県におよび、北里大学生と卒業生はもろんのこと、一般の方も多く、母親と連れ立って来た小学生もいたり、多彩な顔ぶれでした。なんと、我等が水産学部（現、海洋生命科学部）教授であった山森先生、神谷先生もご来場されていました。北里大学同窓会の島田肇会長よりご挨拶を頂いた後、北里大学薬学部の供田洋教授より、「微生物資源は薬の宝庫」という演題で、微生物がつくる二次代謝産物のひとつである抗生物質や医薬品のもとになるものに焦点をあてたご講

演を拝聴しました。講演内容は、世界で始めて発見された第二次世界大戦で感染症から救った抗生物質ペニシリン、土壌から発見した放線菌に由来して結核の治療に用いられた抗生物質ストレプトマイシンなど、微生物資源からの創薬に関する歴史から始まり、微生物からの創薬と北里研究所の係わり、これまでに行われてきた土壌中の微生物由来の創薬の研究、多種多様でいまだ発見されていない微生物の重要性などについてでした。我々が日ごろお世話になっている「薬」が気の遠くなるほどの研究のためものであることを再認識させて頂くとともに、人類にとつて重要な薬の開発には微生物は欠かせない存在であることをお教え頂いた講演でした。

次に、北里大学海洋バイオテクノロジー釜石研究所の笠井宏朗部長補佐より、「海洋微生物の多様性を利用したバイオテクノロジー」という演題でご講演を拝聴しました。北里大学海洋バイオテクノロジー釜石研究所の前身は、1988年に釜石市平田に開業した株式会社海洋バイオテクノロジー研究所(MRI)であり、多数の海洋微生物を有する海洋バイオ分野の最先端研究所として多くの成果を挙げてきましたが、2008年4月

から学校法人北里研究所に継承され創薬プロジェクトなどが展開されています。講演内容は、海洋微生物を用いた創薬研究、海洋から分離培養した様々な微生物の「特性」を活かして環境汚染を微生物で除去する技術に関する研究、地元岩手県の発酵食品の微生物を活用する研究などについてでした。

さらに、北里大学海洋生命学部の三宅裕志講師より、「深海のオアシス」という演題でご講演を拝聴しました。講演内容は、普段我々が目にするのが稀な深海とそこに生息する生物に焦点をあてた講演でした。深海は暗く水圧が高く水温が約4℃以下と低いが極めて安定した環境であること、1977年にガラパゴス諸島の深海底において海底から熱水が噴出し噴出孔の近傍に生物が生息することを発見したこと、そこでは地球を食べる「化学合成細菌」を基盤にした生態系が形成されていること、日本周辺では熱水の噴出孔が多数存在するので今後の調査研究が期待されることなどについて、以前所属されていた海洋科学技術センター（現、独立行政法人海洋研究開発機構 (JAMSTEC)）所有のしんかい6500での研究映像をちりばめて、普段縁が無い深海が身近に感じられた分かり易い講演



で、参加者からも多数の質問がありました。なお、江ノ島水族館に勤務している水産学部の卒業生がインド洋にてしんかい6500に乗船され調査をしており、航海日誌が当該水族館のホームページの「航海・採取日記」として掲載されているとのことですので、海洋生命学部のホームページに掲載されている三宅先生の航海日誌とともに、是非ご覧下さい。

最後の講演は、毎日新聞科学環境部の足立句子記者より、「生物多様性と私たちの暮らし」という演題でご講演を拝聴しました。日本のみならず世界中で写した写真をつんだんに用いた講演で、中央アメリカに在るコスタリカ共和国、東アフリカに位置するケニア共和国に滞在した際の内容や、尾瀬ヶ原、丹沢などで取材した開発や気



候変動などの影響を受けた自然や野性生物が紹介されました。人間は生態系の中では頂点に位置する生物であるが、多様な生物とともにバランスを保ちながら共存し我々生活が成り立っていることを再認識させられました。

今回の講演会のテーマである「生物多様性」は、現在のところ広く一般的な用語ではありませんが、環境省など関係省庁からは生物多様性をキーワードにしたプロジェクトが見られるとともに、2010年10月には名古屋で開催される生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）もありますので、今後益々「生物多様性」が脚光を浴び新聞等メディアを賑わすことになるでしょう。

最後に、この度の講演会開催に当たり、北里大学同窓会および関係各位に心より感謝申し上げます。

森山先生教授昇任祝賀会・LME同窓会に参加しまして

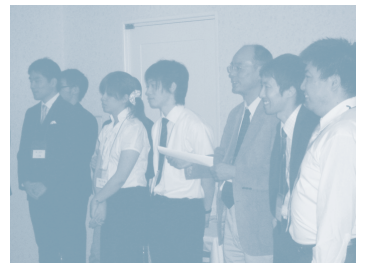
第26期 加藤智美（旧姓高澤）

それは、突然の知らせでした。子供の保育園が決まり、はじめて子供と離れた生活への不安をかき消してくれるような内容の手紙でした。それは、3年ぶりの海洋分子生物学研究室LME同窓会の案内で、なりよりもうれしい知らせであったのは、7年前、学生時代に直接指導頂いた森山先生の教授昇任の知らせでした。

子供は生後8ヶ月で、ハイハイを始めたばかりで、参加するのはどうかと思いました。しかし、お祝いに行きたい気持ち強く、違う研究室でしたが同級生である夫に相談し、家族で祝賀会・同窓会に参加することになりました。そして、開催日までの約1ヵ月半に、



子育てと仕事の両立という新しい生活を悪戦苦闘しながら、始めておりました。開催の



5月30日は、太陽が落ちるとまだ肌寒い日で、会場は、品川駅前の高輪プリンスホテル内の桃李で行わ

れました。会場に入ると、十数名の方が集まっておられ、子供は始めての場所と雰囲気であつたため、会の始まりをとて大人しく待つておりました。川内先生とは約3年ぶりに、高橋先生とは1年半ぶりにお会いしたのですが、お二人とも、お変わりなくお元気でおられました。教授になられた森山先生とは、3年ぶりでしたが、7年前の講師の時とは違い、貫禄がついたように感じられました。会が始まり、川内先生、高橋先生、そして、新任の水澤先生のご挨拶があり、森山先生のご挨拶は、教授昇任までの苦勞話でありました。先生の話が少し続いているので、お腹を空かせた息子が声を出し、話を中断させてしまい、ご迷惑をおかけしてしまいました。先生は笑い話にしてくれましたので、会場の雰囲気は和み、助かりました。

乾杯後、先生方と皆様それぞれ

が会話や食事、お酒を楽しみまして、ほろ酔いに成り出した頃、LME同窓会恒例の近況報告のマイクが回り始めました。私はもちろん、子供と仕事の両立を始めた事を話しまして、さらに飛び入り参加の夫にもマイクが回り、自己紹介と参加しての感想を述べておりました。他の方々は、健康の事、転職などの仕事の事、結婚の事など、様々なご報告がありました。近況報告が終わることは、子供の眠さに負け、先に退出させて頂

ました。今回、家族で参加させていただき、ご迷惑を掛けてしまった事や不愉快に思われた方もいたかもしれませんが、久しぶりに、先生方や先輩、同年代の同窓生に会え、来なかつた同窓生の近況を聞けてよかったです。家族でこのような会に参加できることは素晴らしいと思います。とてもよい経験をさせていただき、また、とても楽しめました。家族で同窓会に参加できることは素晴らしいことだとしたいと思います。家族参加を許していただきまして、ありがとうございました。



加藤さん御一家

三水会創設30年を迎えるにあたり：前会長

水産増殖学科 3期生 長谷川一敏

三水会員の皆様におかれましては益々ご健勝の事とお慶び申し上げます。

私事、平成9年5月、長屋信博氏（1期生）より会長のタスキを受け取り、今年5月、高橋明義氏（5期生）にそれを引き渡しました。会長を務めました12年間、役員始め会員の皆様方には多大なご協力を賜りましたことこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

自身、ボランティアとして始めた同窓会活動でしたが、いつの間にか年間スケジュールは三水会と共にあり、正直止まらない汽車

長屋 高橋 長谷川



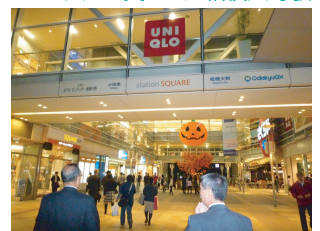
に乗ってしまった、が実感でしたが、親睦会等で数年ぶり：数十年ぶりに友人と再会し、語り、飲み交わすことができたのが何より代えがたい喜びでした。そんな時の話題は決まって《三陸時代》。話は尽きません。

私が会長に就任しました平成9年（1997）は22期生までが卒業し、会員数3550名を数える組織でした。その年まず手掛けたのが規約の改正でした。不必要な箇所は省き、新たに必要なものを補足するといった作業を副会長を中心に議論を重ね1年がかりで行いました。

翌平成12年（2000）は三水会創設20年にあたり、その記念事業として東京・池袋サンシャインシティにてイベントを開催しました。一部の講演会や二部の国際水族館でのパーティーには各地より駆けつけた多くの会員や恩師で大盛況となりました。

また、会員の心のよりどころのひとつとして各研究室があります。

大きく変わった相模大野駅



当時は食品学科、増殖学科それぞれ5講座、合わせて10講座の研究室がありました。これらすべての研究室にOB会を目標に協力をいただき現在も活発な活動を続けています。

そして会員の増加と共に全国各地での活動も始まり、北海道地区、関西地区、九州地区等では毎年各地区を巡り地方親睦会が活発に開催されるようになりました。

そんな同窓会活動に必須の事務も、今でこそパソコンや携帯メールで済ませられる会議召集や会場手配、役員への連絡、資料作りが当時はまだOA機器の整備前で、往復葉書、電話、ワープロ、コピー、ファクシミリ等のフル活用でしたので大変だったことが懐かしく思い出されます。

現在三水会の会員は5700名を数え、会員の増加に伴いここ5年間は安定したサービスを発信することに力を注ぎました。

三水会報はカラー印刷を含むA4サイズとし、会員や学部の情報をリアルタイムに伝えるホームページの開設、現在はライブカメラ

にて三陸キャンパスの様子を観ることも出来るようになりました。そして準会員（在校生）に対しては課外活動助成を始め卒業生講師による「就職ガイダンス」等、創生時より続けています。

平成22年度三水会は創設30年を迎えます。又、母校水産学部は平成20年より海洋生命科学部と名称変更し新たなスタートをきりました。

三水会もその時代や規模に応じ会員のニーズに対応して行かなければなりません。

これからも三水会を通し会員と母校の架け橋となるためにも、微力ながら精一杯努力していきたいと考えております。三水会がさらに発展する事を心より祈念いたします。

一通学は今も神奈中バス



就職ガイダンスに参加して

堀田 桃子

2002年3月(卒業)
2004年3月(修士課程修了)

去る10月16日、三陸キャンパスで行われた就職ガイダンスに参加してきました。久しぶりに訪れた三陸は懐かしくもあり新鮮で、ガイダンス前の短い時間に構内をまわりながら、新しい施設に驚いたり、「就活スーツ着こなし講座」というイベントに感心したりしました。卒業して6年近く経つので、顔見知りなのはほとんど先生方や事務所の方ばかりでしたが、大好きだった学食や、流れる空気は以前と変わらず安心しました。

葛西臨海水族園「東京の海」水槽前にて



私は現在、葛西臨海水族園の調査係に所属し、展示生物の収集を主に行っております。ふつう水族館などの施設では、生物は業者から購入したり漁師の方から譲り受けたりという形で集めることが多く、採集専門のスタッフが

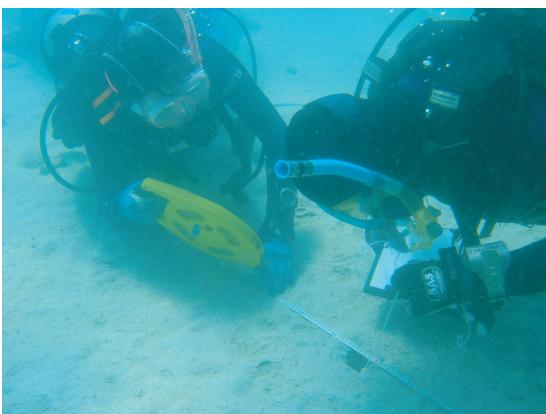
というのは全国でも非常に珍しいのです。私達は採集に専念できるという強みを活かし、海外で採集を行ったり、一般に流通しないような生物を収集したりしております。係内には園内にいるよりも出張している時間の方が長いことや、南極・北極の海へ潜って採集をした経験があるツワモノもおり、まさに七つの海をまたにける仕事だと感じます。最近では、諸事情により海外での採集は以前のように頻繁ではなくなりましたが、それでも、メキシコや小笠原諸島父島での採集、鹿児島県でのマグロ畜養などを経験し、やりがいを感じながら過ごしております。

今回のガイダンスでは、水族館への就職を希望する方にもそうでない方にも、少しでも参考になることがあればという想いで話をさせて頂きました。私自身、在学中は水族館への就職を漠然と夢見る学生の一人でした。当事、学内で水族館への就職について相談すると、狭き門だ、まず難しいだろう、就職しても苦労する、ということを言われ続けましたが、今思えば先生方のアドバイスは真実でした。何故あの時引き返さなかったのかと思つたことは1度や2度ではありませぬ。それでも、先生方の言葉に含まれた「全く可能性が無い

訳ではない。」という一言だけを都合良く信じてマイペースな就職活動を行っていた気がします。卒業後は淡水生物を展示する滋賀県の博物館で嘱託職員として3年半務め、その後、岐阜県の水族館で広報担当を経験してから現職に就きました。結果的に、希望する就職先に落ち着くまで4年かかった訳ですが、険しく、不確かな道のりを選んできました。私だからこそ伝えられたものがあつたのではないかと思います。

もちろんネガティブな話だけをした訳ではありません。辛い時代を支えたり、就職活動で役立つ学生時代の思い出・経験も取り上げました。私は就職試験を受ける際、いつも三陸メモと名づけた紙を持ち歩いていました。メモには、三陸で出会った心動かされた景色、生物の面白さを改めて実感した出来事などが、簡易書きで淡々と書かれています。夏虫山で見た流星雨、夜光虫が光る海を泳いだこと、通学途中に熊に出会ったこと、そんな思い出や経験が自分を支えていると思うことは、自信が無くなりかけた時、いつも気持ちをややかしくしてくれました。きっと三陸で時間を過ごした卒業生は年代を問わず、似た感覚があるのではないのでしょうか。また、話の

メキシコ ラパスにてジョーフィッシュの巣穴調査中



最後には、先生方は厳しい意見を下さりながらも親身になつて考えてくださるということ、当たり前だけれども自分から動かなければ何も始まらないということを、実感を込めて伝えさせて頂きました。在学生の方がどんな風に受け止めて下さったかは想像するしかありませんが、頂いたいくつかの質問から、丁寧に自分たちの未来を想像されている様子が伺えました。また、質問に答えることで初心を思い出し、改めて仕事への愛着を深めることができました。卒業してから学部の皆様とふれあい、さらに自分自身の人生にも向き合うことが出来た貴重な時間を頂いた事に、心から感謝しております。

卒業生近況報告

私は24期（1999年卒）八鳥洋二（ハットリヨウジ）と申します。「フィッシュナビ」という、フィッシング専門の旅行を主体に、釣りに、魚に関する仕事をしております。「旅行」には、個人旅行、ハネムーン、卒業旅行、団体旅行、出張旅行……目的に応じていろいろなスタイルがありますが、それに好きな「フィッシング」を組み合わせたらどうなるか？ そんな釣り好きなお客様向けにツアー企画しております。

私が小さい頃、作家（故）開高健に憧れ、「オーパ」という本を通じて「海外フィッシング」という存在を知りました。それは私にとってまさに夢のような世界でしたが、逆にこんな非日常的な世界には縁がないだろうなど、割り切って読んでおりました。そんな私もいつしか社会人となり、休暇を利用して1人でアラスカへ釣りに行ったのをキッカケに、私の人生観が180度ガラッと変わりました。自分の中に眠っていた何か



かが覚醒し、いつしか休みさえ取れば「オーパ」に登場した主要な国に釣りに歩き、その中でもアラスカの魅力にとりつかれ

何度も地を踏むようになりました。いつの日かそんな人たちの為に架け橋になればらと思ひ、2005年に「FISHNAVI（フィッシュナビ）」というブランドで、フィッシング専門の旅行会社をOPEN致しました。

私が作っているフィッシングツアーには、大きく分けてソルト（海釣り）と、フレッシユ（淡水釣り）の2分野になります。その中でも前者（海釣り）はGTやセイルフィッシュを狙ったルアーフィッシングがダントツの人気で、今までに経験した事のないパワーあふれるエキサイティングな釣りがここにあります。これらフィールドは南国をメインとしている為、リゾートツアーとの組合せができるのが特徴で、最近

はご夫婦やカップルに絶大な人気があり、「ハネムーン・フィッシング」という新たな市場もでき上がりました。そして後者（淡水釣り）においては、トラウトやサーモンフィッシングが昔から大人気で、トラウトの聖地でもあるニュージーランドをはじめ、サーモン週上で世界一を誇るカナダやアラスカといった北米エリアに人気が集中しております。ここでは釣人だけでなく、アウトドア好きな方、旅を通じて何かを探したい方、感性を研ぎ澄ましたい方など、前者とは異なり、野性味溢れたツアーがここにあります。

そもそも「釣り」には皆さんご存知の通り、ルアー、フライ、キャスト

ング、ジギング、餌釣り、など……、また、狙う魚、場所、得意な釣りなど多様化しております。近年は延竿でキングサーモンを狙ったり、スピニング・タックルでカジキを釣るなど、道具の進化に伴い魚だけでなく釣りのスタイルにも「旬」というものがあります。この国では何が釣れるか？ 逆に言えばこの魚を釣るにはいつどこへ行ったらよいのか？ 今年の傾向どうか？ 次は何処が（どのような釣りが）ブームになるのか？ 世界中の釣りガイドにネットワークを持ちながら、旬な情報と魚を日々追っかけてござっております。数ヶ月後、半年後、1年後の潮を見ながら、お客様とツアープランを立てる事もしばしば、新規開拓の為に、現地へフィッシング機材を持ち込み、現地の人に教えて新たなツアー市場を作る事もあります。



そしてツアー要望も十人十色、これを釣りたいと目的がハッキリしている方が基本ですが、ビジネスとして接待フィッシングを……、女性も楽しめる釣りを……、社員旅行で釣大会を……、旅行中にフィッシングをしたくなった……、中には日取りから対象魚まで全

てを任せるお客様もいらっしゃいます。「釣り」には、その人の性格、仕事、そしてライフスタイルまで反映するほど、魅力があり、奥深さがあります。昨年は横浜で開催された国際フィッシングショーに弊社フィッシュナビも出展いたしました（小さいブースではありましたが）。

アラスカやカナダのフィッシングガイドも応援にかけてくれて、卒業生の方々、お客様にもお立寄り頂き、無事に幕を閉じる事ができました。ニッチな分野ではございますが、こんな世界があるんだな……と、皆さんの心の片隅に置いて頂ければ幸いです。

国内・海外フィッシング専門旅行会社
★FISHNAVI／フィッシュナビ★

〒251-0035
 神奈川県藤沢市片瀬海岸2-18-3 2F
 株式会社エイトバード
 神奈川県知事登録3-801号

24期 八鳥洋二（ハットリヨウジ）
 直通（IP）TEL：050（5509）8249
 FAX：0466（55）5767
 メールアドレス：fishnavi@8bird.com
 ホームページ：http://www.8bird.com/fishnavi/



「北里大学出身」を合言葉に、この業界で、水産界で、社会でご活躍されている多くの卒業生の方々と関われる事を願っております。基本は旅行会社

ですので、学会や出張の航空券手配をはじめ、フィッシングに関係しない分野でも、是非ともお気軽に「フィッシュナビ」をご利用頂ければ幸いです。

第4回潜水部OBの集い開催報告

久保田龍二（12期生）

毎年恒例になっています「潜水部OBの集い」が平成21年9月27日（日）に東京都内で開催されました。潜水部OBの集いは今回で4回目となり、参加人数は18名、西は鹿児島、東は岩手から参加され、年代的には第1期〜36期・10代〜50代にわたりメンバーが集いました。

残念ながら今回は前顧問であられた井田先生や、現在の顧問であられる朝



日田先生（9期OB）は都合により参加されませんでした。参加者の中には1期生の大先輩もいらつしやり、部創設時の地元漁協さんとの交渉など苦労話をお聞きすることができました。

現役の36期生からは現在の活動状況や課題などの話も聞くことができ、現在は、部員数も多く（特に女子部員）、講習会などでエアタンクを多く使うときには、エアチャージで徹夜状態とのことでした。この状況を改善するには、親瓶（エアをストックしておく大容量の空気瓶）の整備が必要でありOBからの寄付なども含めて予算の確保が喫緊の課題であるとのことでした。

部創設以来36年という年月が経ち、時代・世の中・考え方・風貌？も変わりました。活動方法も手探り状態の第1期から、やがて体育会系根性ダイビング（何故か駅伝1位が至上命題）へと移行し、ダイビングブームとともに安全ダイビング（立泳ぎ禁止etc）が重視され、現在では体育会系や根性という精神は薄らいだようですが、海底清掃など環境保全や地域貢献など時勢に対応した活動を行いながらダイビングを楽しんでいるようです。しかし、水中の世界では人間はあくまでも「ビクター」であることを忘れずに、最低限の体力・知識・冷静さと多少の“根性”は忘れずに事故・クレームなど無いように活動を行ってほしいと願っております。

潜水部・三陸という一つの繋がりを持った仲間との語らいは、年代の差はあれ三陸の下宿でいつものように酒を酌み交わしていた時のように、あつという間に時間が過ぎてしまいました。

4回目ともなると毎回参加するメンバーがある一方、新たに参加する人もいるので今後も毎年行っていくことで、より多くの人に参加してもらいたいと思います。おそらく現役当時しごかれ（しごいた）……など苦い思い出から、参加を渋っている人もいるかもしれませんが、鬼のような先輩も今では世間の荒波に揉まれてかなり丸くなっていますので、是非、次回はご参加をお待ちしております。

「たかが三陸・されど三陸」「嗚呼三陸や・三陸や」「Let's Diving!!」

第37回漁火祭実行委員会

副委員長 福本 七重

この度、平成21年10月10日（土）・11日（日）に北里大学海洋生命科学部において第37回漁火祭を開催いたしました。

今年海洋生命科学部の学生が初めて実行委員に加わり、新しい波が起せるようにと、テーマを「New Wave Marin Bio」にし、平成21年5月より80人で奔走してまいりました。前日までは大型台風が接近していて、天気も



危ぶまりましたが、当日はそれが嘘のように最高の天気めぐまれ、昨年同様「マグロの解体ショー」をメイン企画とし、大変多くのお客様にご来場いただき、大いに盛り上がりました。

この漁火祭を通して、学生生活であることに奮闘する楽しさ、皆が一丸となることの大変さ、そして水産学部創立から37年間続いてきた漁火祭の伝統を受け継ぐことの大切さを実行委員一同強く感じる事ができ、大変よい思い出になりました。

盛り上げてくれた学生の皆さん、ご来場いただいた全てのお客様に感謝いたします。

三水会の皆さんには、漁火祭の更なる躍進のために一層のご高配をお願い申し上げます。



■ 海洋生命科学部学生課だより

三水会の皆さん常日頃お世話になっております。前回9月発行分までで報告してなかったことや、近況について報告いたします。

昨年4月に学生生活における様々な悩みや問題を軽減、解決するため、学生相談室が開設され、5月から新沼真弓さんというカウンセラーが着任しています。現在週1回の勤務となっておりますが、保健室の花崎さち子さんと連携して、学生を強力にサポートしていただいています。



昨年11月12日に小壁漁港にクジラが打ち上げられ、28日までの調査で確認例が極めて少ない「ハッブスオウギハクジラ」である可能性が高くなり、本学部の三宅裕志講師、国立科学博物館(東京都)脊椎動物研究グループの山田格グループ長等による合同調査が行われ、体長5.3メートル、重さ約1.5トンのクジラを解体し骨格標本などを採取しました。本学部生も多数参加し、初めて鯨を目の当たりにして貴重な体験をしました。マスコミも多数取材にきました。現在もDNA分析と採取した骨標本の分析により同定作業は続いているようですが、ほぼまちがないようです。

昨年12月17日、18日の2日間、相模原キャンパス体育館において全学合同の企業研究会が行われ、本学部からも延べ244名が参加しました。97名はバス2台に分乗し、行きは前夜21時に三陸発、帰りは18日17時に相模原発という強行スケジュールにて参加しました。この企業研究会が始まって今回で3度目となります。本学部は、三水会の皆さんのお力をお借りしながら、例年高い就職率を維持していましたが、就職氷河期のため、今年度の就職内定率は76%(平成22年2月現在)と非常に苦戦しており、この状況は来年度も続くものと予想されます。皆さんへのお願いですが、お勤めの会社等で採用枠がございましたら、是非とも学生課までご連絡いただきたく、よろしく願いいたします。連絡先:0192-44-3940(学生課)

昨年12月23日から26日にかけて、授業の一貫として、学部初の洋上実習が行われました。北海道大学の練習船「おしよる丸」に本学部の2年次、3年次生の希望者62名と、指導者の加戸隆介教授、山田雄一郎講師、実習補助の大学院生5名が乗船し、海洋の環境や生物に対する理解を深めることを目的として、海洋観測・プランクトン調査・漁獲物調査を行いました。最初は船酔いで苦戦した学生もいたようでしたが、三陸沖を周回しながらの貴重な体験を経て、皆晴れやかな表情で大船渡の野々田埠頭に帰港しました。



今回の報告は以上とさせていただきます。三水会の皆さんにおかれましては、健康にご留意されながら、益々ご活躍されることをご祈念申し上げます。

■ 「平成22年度三水会定期総会のご案内」

下記により平成22年度三水会定期総会を開催します。役員、代議員はもとより一般会員も傍聴できます。

開催日時:平成22年5月22日(土)午後6時~7時(受付5時30分)

開催場所:北里大学白金キャンパス 薬学部1号館 5階 1507教室

- 議 事: 1、平成21年度事業報告及び収支決算
 2、平成22年度事業計画及び収支予算
 3、その他

~ 訃報のお知らせ ~

平成22年1月末日までにご逝去のお知らせをいただきました会員の方々です。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

名前	卒業年度	逝去年月日	名前	卒業年度	逝去年月日
平井 孝司	1982	平成16年3月29日	調 敏明	1979	平成21年10月12日
小原 實	1976	平成20年7月26日	吉川 雄三	1982	平成21年11月27日
尾家 雅利	1996	平成20年10月19日			

編集後記

政権交代をして、新たな年度に入ろうとしておりますが、経済的には低迷が続いているようです。そのような中、エコロジーや一次産業への注目が、遅ればせながら高まってきています。マスコミ主導の中身の薄いブームにも見えますが「うそから出たまこと」で環境や資源といった地球、国家、地方のすべてにとって大切な問題が良い方向に向かっていってほしいと願っています。三陸ライブカメラを見ながらみなさんも環境問題を一考してみたいでしょうか。